

商機ふたたび

日本関係の業務はかなり安定してきたが、「卵をすべて同じ籠の中に入れておく」のは危ない。事務所の欧米案件はこの時、非常に限られていたのだ。

案件が少ないだけではない。回りを見渡すと、陳傳耀、張蒼浪、陳燦暉といった日本語の達人はいるが、英語の人材はわずか。敏生に英語力の強化を勧めていた陳天宝は、すでに事務所を去っていた。「欧米市場の開拓は自分が」と敏生は覚悟を決めた。最初の仕事は英語の勉強であった。素地はある。練習すれば度胸もつく。さっそく英語教師を新聞広告で募集。応募してきたアメリカ籍の弁護士オルデンバーグとはその場で意気投合。三ヶ月の会話クラスで敏生は、頭の底に眠っている英語の基礎を呼び覚まし、言いたいことを表現しようと必死に努力した。オルデンバーグは傍らで発音を矯正する。「英語は一字一字読んでいてはだめ。ワンセンテンスを一息で流れるように話さなければ通じない。」と、オルデンバーグ先生の教え方も良かった。これまで口を開けば「Excuse me?」だった敏生の英語はめきめき上達。オルデンバーグとも友情の絆で結ばれた。

一九六九年三月三日、米ミラー・モンゴメリー・スポールディング法律事務所から書面で、台湾地区のパートナーにならないかという誘いがあった。東京に拠点をもっていた同事務所は、東アジアの第二の拠点として台湾を考えていたのである。共同出資者の一人シーランド氏は敏生に、中、米、日将来の協力関係と米企業の実態を理解するためには是非とも訪米すべし、それについてはウォール街の彼らの事務所に執務室を用意するからと、しきりに勧めた。

アメリカも日本と同様、工業化の進む台湾に将来、多くの企業、工場、製品が上陸し、それにともない国際協力を業務とする法律事務所が必要となることを見越していた。商工業の発展がもたらすビジネスチャンスに敏感な人たちは、早くも準備に取りかかっていた。

いろいろ思いを巡らして、敏生はこの訪米提案に大きく心を動かした。

今回もまた仲を取り持つてくれたのは李泉浜であった。李泉浜は義侠心のある人で、敏生の事業をもりたててくれた恩人の一人。借金や重大事故で困っている時は、いつも彼が保証人を引き受けてくれた。

六月には国際工業所有権保護協会（A I P P I）第二七回総会がイタリアのベニスで開催されることに。敏生はこの大会への参加を決め、合わせて五ヶ月の欧米日視察旅行に立つことになった。

ビザの問題は深刻だった。台湾と国交のある国はわずか。敏生はイタリア、スイス、西ドイツ、オランダ、ベルギー、フランス、イギリス、アメリカおよび日本での滞在を予定していたから、ビザの取得には困難が予想された。政府の出国制限という難関もある。

敏生の身分は弁護士だから、出国の許可は本来なら法務部で申請すべきところだが、法務部は政府機関中もっとも保守的な役所。敏生は弁理士の所轄機関である經濟部商業局に申請を出した。

ところが經濟部からは何の御達しもない。予定も迫っている。敏生は意を決して經濟部へ直談判に及んだ。

經濟部の事務室には補佐官の晏さんがしきりに文書の審査をやっている。敏生は彼の前に立つと、今回の視察の目的から説き起こし、国際的な影響などなど大いに力説。ところが晏さんは、表情一つ変えず事務を続けている。焦ったのは敏生。經濟部はもっとも開放的な役所。ここでだめなら許可の

見込みはない。

「弁護士の私が親方の法務部へ行かず、弁理士ライセンスを発行した経済部を頼って来たんだ。ちよつとは喜んでくれてもいいじゃないか。」と、敏生は半分やけになっていたが、これを聞いた晏さん。筆を止めてカラカラと笑った。

敏生はこうして出国許可を手にしたのである。

その後数年たって、後輩の弁護士と会うたびに、訳も分からずお札を言われることがよくあった。よくよく聞いてみると、弁理士資格で出国するという前例を開いてくれたからだという。弁護士の出国はこれで確かに楽になったのである。

「出国」はかなったが、他国に「入国」するには、まず香港に行つてヨーロッパの滞在国すべてのビザをそろえなければならぬ。

初めての外国。敏生は興奮ぎみだった。台湾で練習した英語は本当に通じるのだろうか。不安と緊張を連れて香港に到着。香港のスーツは上物と家族から聞いていた敏生は二着新調。カメラも買ったし、初めてヤムチャも食した。国境近くで大陸を覗いてもみた。もちろんビザも完了。

香港からローマへ向かう途中、飛行機はアテネで乗り換え。大事な資料の入った荷物が紛失したら、と悩んでいた敏生だが、となりに座ったニュージールランド美人と話しているうちに、そんな悩みはどこへやら。話題は尽きない。敏生は出国早々。異国美人の心を射止めたようだ。大きな自信を抱いてイタリアに向かう。

ローマ到着。回りは全部イタリア語。不安な気持は、荷物が無事見つかつてようやくやく一息。当地の人たちはみな親切だ。タクシーを拾ってホテルに向かう。ぐるっと大回りして元の場所へ。

ホテルは道の向かいにあった、という一幕もあったが、それでも敏生はイタリアが気に入っていた。イタリアは彼に「手応え」を感じさせる国だったのだ。

下手な英語に囲まれて言葉に自信を持った敏生は、ますます大胆になってきた。会議の数日前、あこがれのローマ遺跡を見物。ボルサリーノをかぶってヨーロッパ紳士になった気分。

AIPPI総会開幕。敏生はベニスに向かった。

参加者一五〇〇人。名簿を受け取ると早速、日本の同業者をさがす。このころ日本の顧客は百社前後で連絡も頻繁。手紙のやり取りだけで顔を知らない「ペンフレンド」に、会議の場を借りて面識を得た。中でも日本の商標案件第一号を依頼してくれた杉村暁秀氏とは、すぐに意気投合した。

台湾の同業者とも会った。台湾の特許、商標代理をほとんど牛耳っていたJames Leeと李沢民氏や会計士の頼文彬氏。訪米市場では、敏生はまだまだ無名に等しい。

李沢民氏とは初めてだったが、コーヒーショップに誘った。敏生は例のAPAA創設提案を興奮げみに告げるが、「帰ってから政府に報告する。政府の同意をもらわないと。」といたって冷淡。

「こんな事にまで政府の同意がいるのか？」といぶかる敏生は、そそくさと支払を済ませて店を出た。

日本の友人たちはAPAA創設にみな興味を示し、敏生と熱心に意見を交した。創設はあきらかに必要であった。

正直言って、会議の参加者で「台湾」を知るものはわずか。政治意識の多少ある人ならば、「蔣介石のChina」と「毛沢東のChina」で区別はできたが、タイと台湾の聞き分けができず、敏生をタイ人だと思いついていた人もいた。

ヨーロッパはもともと多言語。一つのテーブルに座っていても、ドイツ人同士はドイツ語、フランス人同士はフランス語といった具合に、仲間うちで盛り上がるだけ。国際会議とはいいながら、グループ間の交流は少ない。

こういう打ち解けない雰囲気面白からず思っていた敏生は、隣の人に話しかけるふりをしてある日、ついに不満をぶちまけた。

「私の話せる言葉は優に世界二十億の人口をカバーしている。中国人は十億人あまり。日本語を話せる人を二億人として合わせて十二億。それに英語人口を加えたら、どうです？二十億以上にはなるでしょう。ところが私は、ここに座っていても皆さんのお話がぜんぜん分からない。英語は皆できるんだから、ひとつ英語で話すようにしませんか。」

テーブルは一瞬静まり返ったが、笑みを浮かべて同意の表情。それから英語で話すようになった。最後はさよなら舞踏会。ブラツクタイに盛装のパーティーでは、オランダの美人弁護士をパートナーに誘った。パーティーの花、彼女と踊りたい男たちはみな敏生に挨拶。敏生はこれでまた顔売った。

曲は終わり人も去った。多感な敏生は名残惜しさでいっぱいだ。ここで結んだ異国の友情は、これから四ヶ月間、歴訪する各地で重要な人脈として、実を結んだ。

滞在時間はまだある。敏生はミラノでメーカー三社と法律事務所を訪問。イタリア人のこせこせしない自在な働きぶりに、敏生は深く印象づけられた。

これから飛行機に乗ってイタリアを離れる時になってようやく、いたるところで見かける「piano」が、実は「階」を表わす言葉であることに気づいた。